

かかあ天下と空っ風

北海道から沖縄までタテに細長いニッポン。気候も違えば人々の性格も違い、価値観はもちろん、相性さえも変わる。脈々と形成され、遺伝する出身県DNA。

富岡製糸場に代表される群馬県は夏暑く、冬雨少ない乾燥気候。その自然が育てた、女房自慢の群馬県人

「かかあ天下に空っ風」、「赤城山に、忠治にバクチ」

上州名物の三つの「か」は、「かかあ天下」と「空っ風」と「雷」です。

空っ風と雷は地形と気象の問題。

かかあ天下とは、女が働き者で妻が家庭の実権を握っている家庭のこと。

上州では養蚕が盛んであった。

この仕事は女性が行うため、一家の経済の主導権が女性にあることが多く、発言力も大きかった。

きめ細かな蚕の飼育、すなわち女性の持つ繊細な感覚と骨身を惜しまぬ勤勉さであった。

このように上州の女性は、春から夏にかけては、養蚕に精を出し、秋の収穫を終えると今度は、糸挽きと織物に専念した。

そのため品質の優れた繭と生糸と織物を生産する能力を持つ女性は高く評価され、

彼女らの収入は、男性のそれよりもはるかに高額であった。

所で上州では女が男を捨てる。

嫌いな夫、あるいは働きがいも生活力もない夫に多額の慰謝料を支払うことが出来たのは、

それを可能にする経済的実力を手にしていたからである

群馬は関東でも珍しく個性的な県民性。

「赤城おろし」で有名な、寒く厳しい自然環境と土地の貧しさからか、古くから養蚕や絹織物産業が発達。

それらは主に女性の仕事だったため、懸命に働く女房を見て、男どうしが自分の女房を自慢し合った。

群馬の女性は生まれもって行動的。

それを他県人が「かかあ天下」と揶揄し「かかあ天下と空っ風」の言葉が生まれたらしい。

また宿場町だったことで賭場も多く、群馬男のバクチ好きはよく知られるところ。かかあが稼いだ金でバクチを打つとは、まさにヒモ。が、これは義理人情に厚いDNAとして現代に受け継がれている。

新しいもの好きで飽きっぽい性格は、今でもそのまま県民性として息づいている。

戦前、製糸、織物工場で働く女性は、「工女」とか「女工」と呼ばれました。工場で働く男性は、ボイラーや機械技師などごく一部に限られてました。それは、繭から糸をひいたり、布を織るような細かい仕事は、手先の器用な女性に向いていたこと、女性のほうが賃金が安かったことがあげられます。また、養蚕農家においても、小さな蚕のうち、女の仕事とされ、男手が麦刈りや田植えに奪われると、屋内の作業は当然女性の手に委ねられ、家事、育児、養蚕にと、大活躍をしなければ、とてもつとまりませんでした。

いつしか、「上州女は働き者」と言われ、事実、娘が何人も製糸工場で働く家庭では、父親の稼ぎよりも彼女らの賃金のほうがずっと多いという家庭も多かったのです。また、一人前の工女、一人前の蚕飼いになるには年数があるので、女性の晩婚化が進み、男女の結婚年齢の差は、昭和10年当時、全国平均の4才に対し、2.9才とあまり差がないのです。「姉さん女房」も、「かかあ天下」の要素だったのかも知れません。徳富蘇峰は、かかあ天下を、「実力ヨリ来ルモノナリ」としています。十辺舎一九も、「上州の女子は実によく働く。養蚕、糸ひき、機織りをやっているのは女子ばかり。女なくては明けぬ国とは上州のことだ。」と紀行文で語っています。